

12:1 それからイエスは、たとえで彼らに話し始められた。「ある人がぶどう園を造った。垣根を巡らし、踏み場を掘り、尻張りやぐらを立て、それを農夫たちに貸して旅に出た。12:2 収穫の時になったので、ぶどう園の収穫の一部を受け取るため、農夫たちのところにもべを遣わした。

12:3 ところが、彼らはそのしもべを捕らえて打ちたたき、何も持たせないで送り返した。12:4 そこで、主人は再び別のしもべを遣わしたが、農夫たちはその頭を殴り、辱めた。12:5 また別のしもべを遣わしたが、これを殺してしまつた。さらに、多くのしもべを遣わしたが、打ちたたいたり、殺したりした。12:6 しかし、主人にはもう一人、愛する息子がいた。彼は『私の息子なら敬ってくれるだろう』と言つて、最後に、息子を彼らのところに遣わした。

12:7 すると、農夫たちは話し合った。『あれは跡取りだ。さあ、殺してしまおう。そうすれば、相続財産は自分たちのものになる。』12:8 そして、彼を捕らえて殺し、ぶどう園の外に投げ捨てた。

12:9 ぶどう園の主人はどうするでしょう。か。やってくる、農夫たちを殺し、ぶどう園をほかの人たちに与えるでしょう。12:10 あなたがたは、次の聖書のことばを読んだことがないのですか。『家を建てる者たちが捨てた石、それが要の石となった。』

12:11 これは主がなさったこと。私たちの目には不思議なことだ。』12:12 彼らは、このたとえ話が自分たちを指して語られたことに気づいたので、イエスを



捕らえようと思つたが、群衆を恐れた。それでイエスを残して立ち去つた。

「農夫たちのところへ遣わ」された「しもべ」とは、預言者たちのこと。そして「息子」とはイエス様のこと。イスラエルの人々が神に敵対してきた様子を象しています。ここではぶどう園を横取りしようとする強欲な人間の様子が描かれています。ですから、欲に関して警戒する必要があります。

また、それだけでなく、これがイエス様の教えであり、神の国について、信仰と不信仰について教えているということも考える必要があります。

イエス様が人々には不信仰ではありましたが、神の国を築く取組をとまでは考えていないなかっただけ。しかし、結果的にそのような徹底的な敵にまでなつてしまつたのです。それは不信仰を悔い改めなかつたことの結果です。

神に従わないこと、それでも自分を保とうとするなら、神と戦わざるを得ないのです。神のみこころを語る人にダメージを与え、語れないようにさせ、神のみわざを損なうようになつてしまつたことではないでしょうか。

光と闇には中間がないように、信仰と不信仰にも中間がないこと、またイエス様とともに集めない人は散らす人であるということをお忘れないうちにしましょう。主に従わないでいると、いつか主の敵になつてしまつてしまうことも、ですから自分の不信仰な行いや生活に気づいていたなら、今悔い改めて、主の憐れみによつて救えていただきましょう。そして主のみこころへと喜んでチャレンジしていきましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたなどの部分を主は赦おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

